

2023 年度卒業生対象 「学びの実感」 アンケート結果

1 調査目的

4年間の学修にあたって、自己採点による学習の到達状況（どんな力がどれくらい身についたのか「学びの実感」）について明らかにし、本学の今後の教育・支援活動に役立てていくことを目的とする。

2 調査方法

令和 5（2023）年度卒業生 183 名を対象に、Google フォームを活用して「学びの実感」に関するアンケート調査を実施した。卒業認定者発表時に文書にて調査の趣旨を説明し、回答を得た。回答者は、163 名で回収率は 89.1%であった。

福祉力と学士力それぞれの項目について、「非常に身についている」「やや身についている」「どちらともいえない」「あまり身につけていない」の 5 段階評価とした。学科間比較の分析方法として、平均値を出し一元分散分析を行った。

3 調査結果

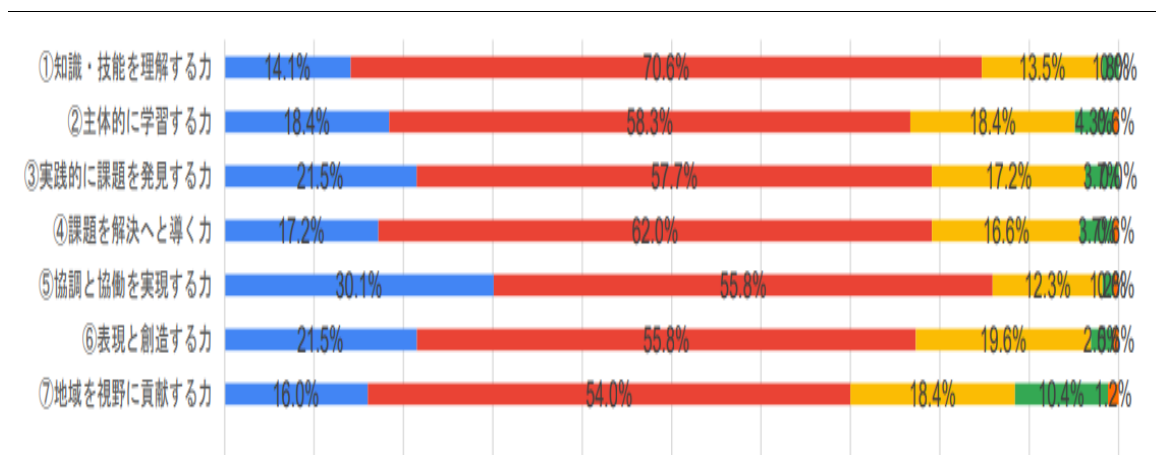
(1) 学科別回答者数・回収率

	福祉心理学科	健康福祉学科	こども学科	合計
卒業生数	90 名	26 名	67 名	183 名
回答者数	82 名	19 名	62 名	163 名
回収率	91.1% (89.3%)	87.1% (94.4%)	92.8% (86.1%)	89.1% (89.1%)

※（）内は令和 4（2022）年度の回収率

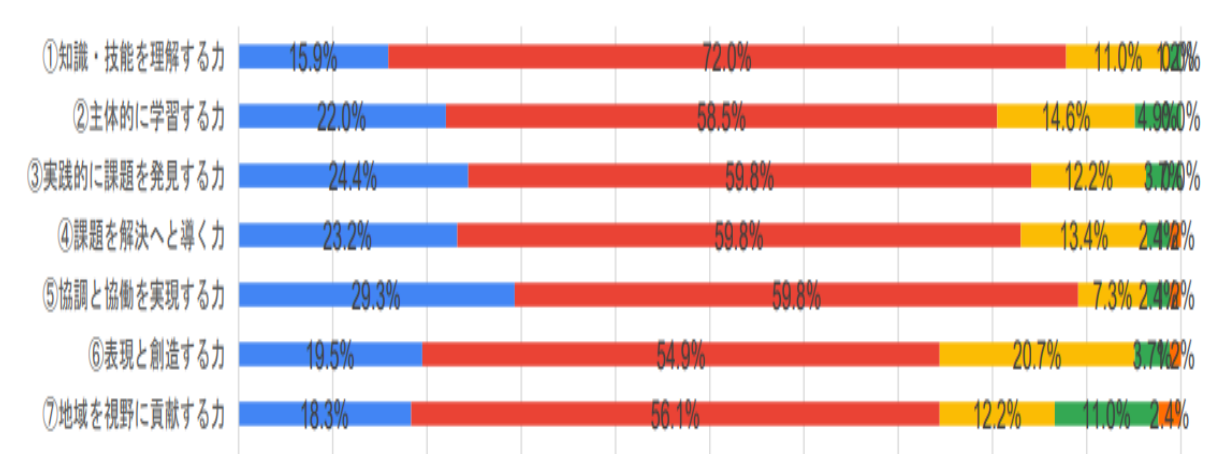
(2) 福祉力

図 1-1 福祉力（大学全体）



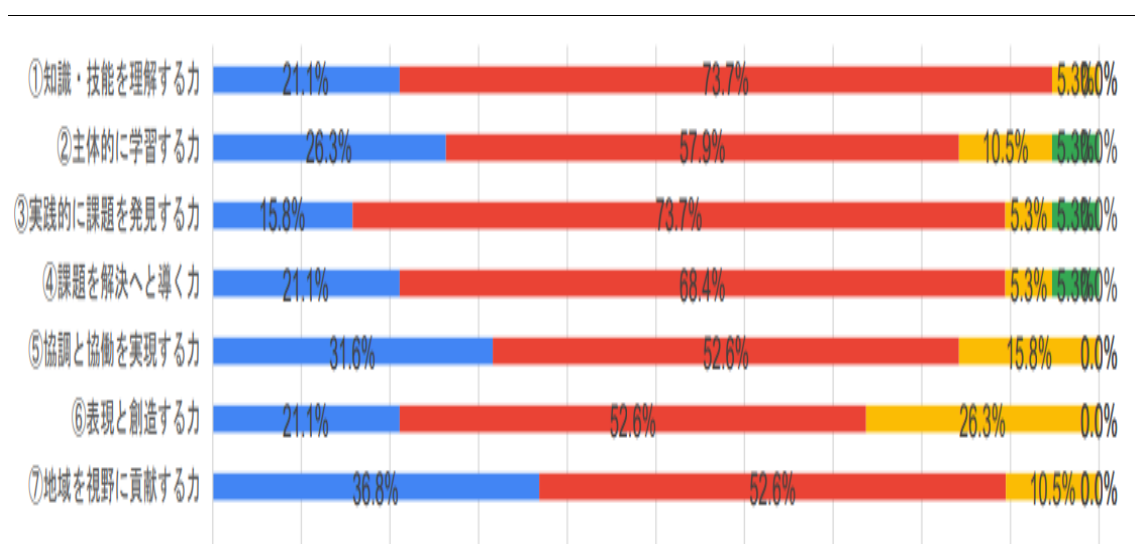
「非常に身につけている」「やや身につけている」が最も高い項目は、「**協調と協働を表現する力**」で 85.9%であった。最も低い項目は「**地域を視野に貢献する力**」で 70.0%であった。昨年度（令和 4 年度）の調査では、「知識・技能を理解する」が最も高かった。

図 1-2 福祉力（福祉心理学科）



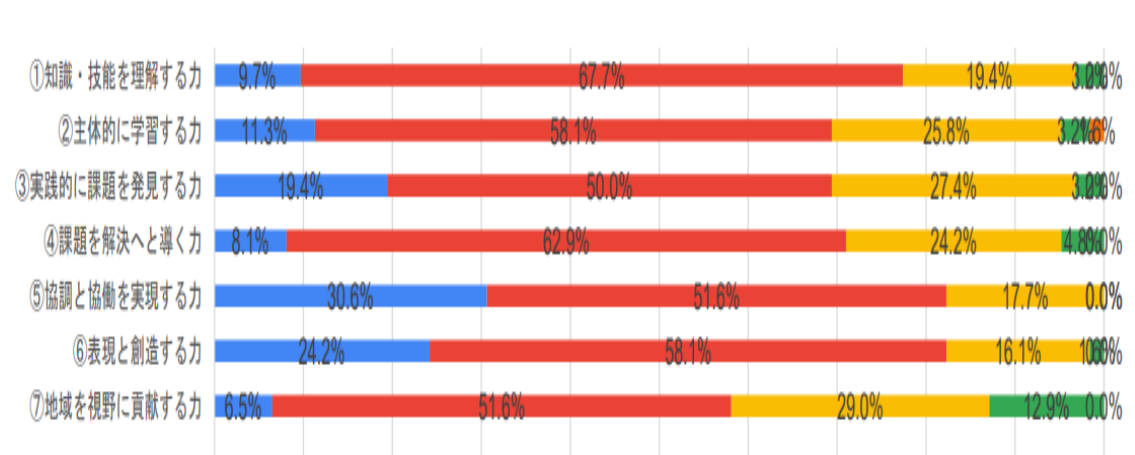
「非常に身につけている」「やや身につけている」が最も高い項目は、「**協調と協働を表現する力**」で 89.1%、最も低い項目は「**地域を視野に貢献する力**」で 74.4%であった。

図 1-3 福祉力（健康福祉学科）



「非常に身につけている」「やや身につけている」が最も高い項目は、「**知識・技能を理解する力**」で 94.8%、最も低い項目は「**表現と創造する力**」で 73.7%であった。

図 1-3 福祉力（子ども学科）



「非常に身につけている」「やや身につけている」が最も高い項目は、「表現と創造する力」で、82.3%、次いで「協調と協働を表現する力」で 82.2%、最も低い項目は「地域を視野に貢献する力」で 58.1%であった。

表 1 学科別平均値のクロス表

	福祉心理学科	健康福祉学科	子ども学科	有意差
知識・技能	4.02	4.16	3.84	学科間有意差なし
主体的学習	3.98	4.05	3.77	学科間有意差なし
課題発見	4.05	4.00	3.85	学科間有意差なし
課題解決	4.01	4.05	3.74	学科間有意差なし
協調と協働	4.13	4.15	4.13	学科間有意差なし
表現と創造	3.87	3.95	4.05	学科間有意差なし
地域貢献	3.77	4.26	3.52	健康福祉学科と子ども学科間で有意差あり P<0.05

「地域貢献」では、健康福祉学科と子ども学科の差に有意差があった。それ以外の項目では学科間有意差はなかった。

(3) 学士力

「非常に身につけている」「やや身につけている」が最も高い項目は、「倫理観」で 84.7%であった。最も低い項目は「数量的スキル」で 59.5%であった。昨年度（令和 4 年度）の調査でも、「倫理観」が最も高かった。

図 2-1 学士力（大学全体）

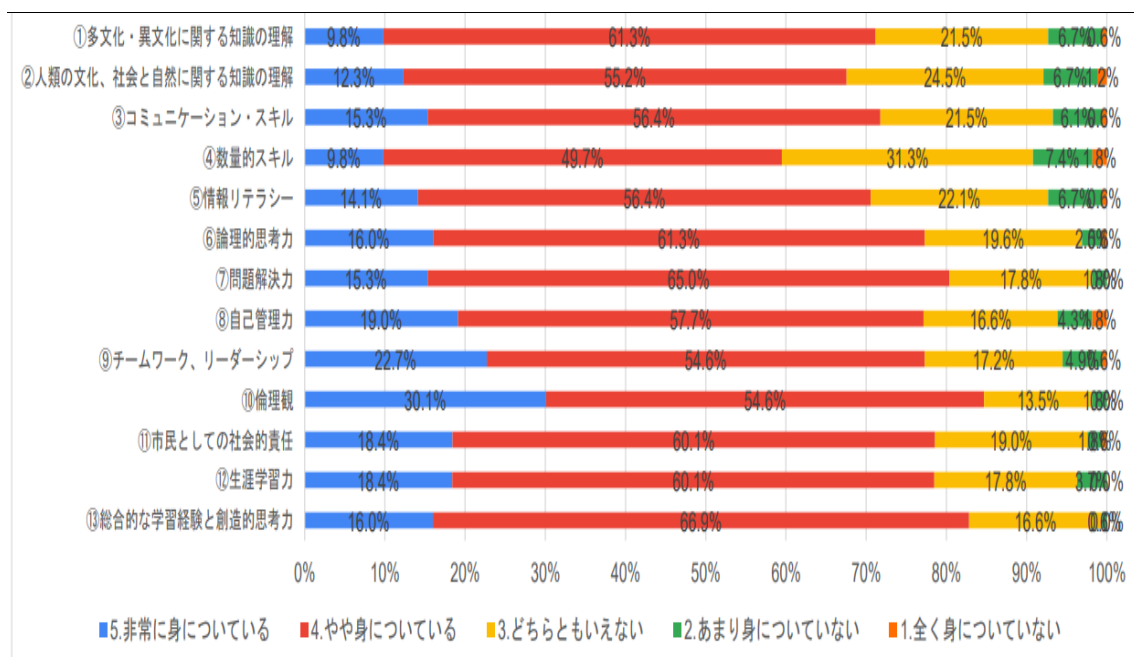
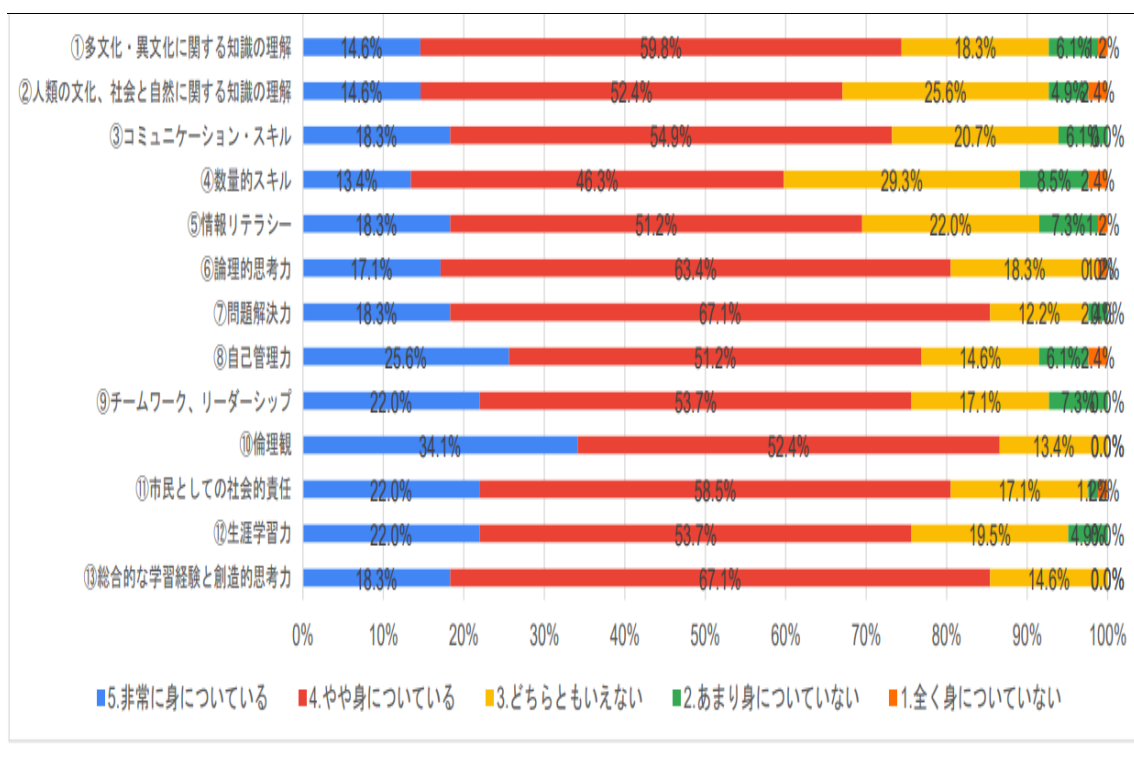
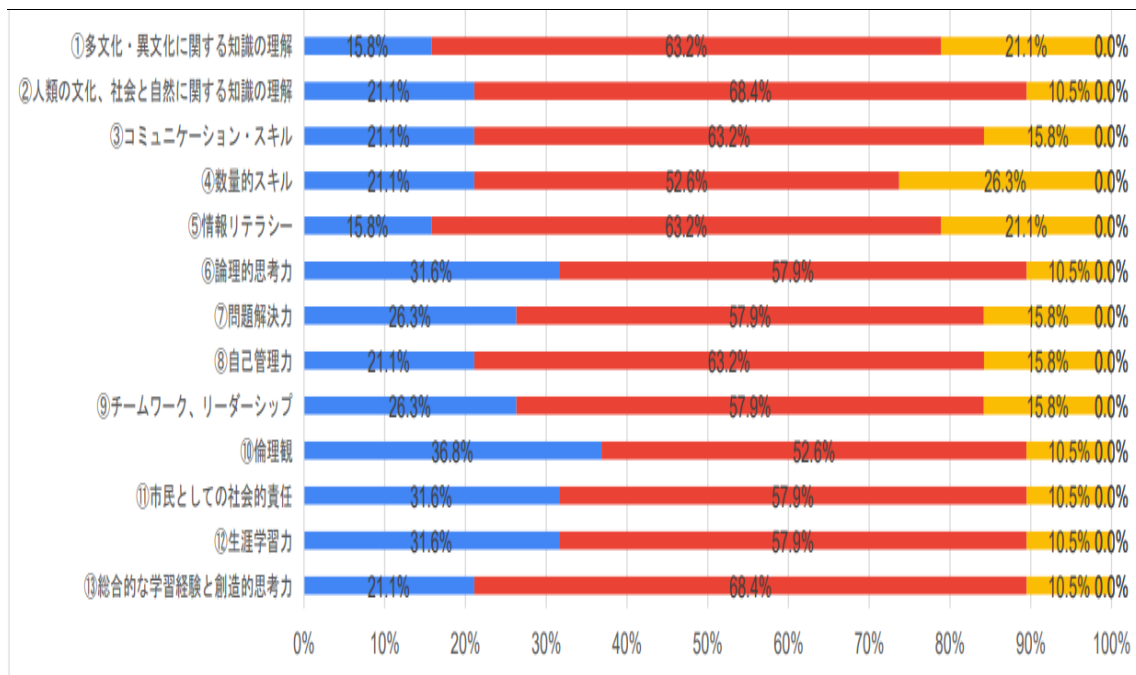


図 2-2 学士力（福祉心理学科）



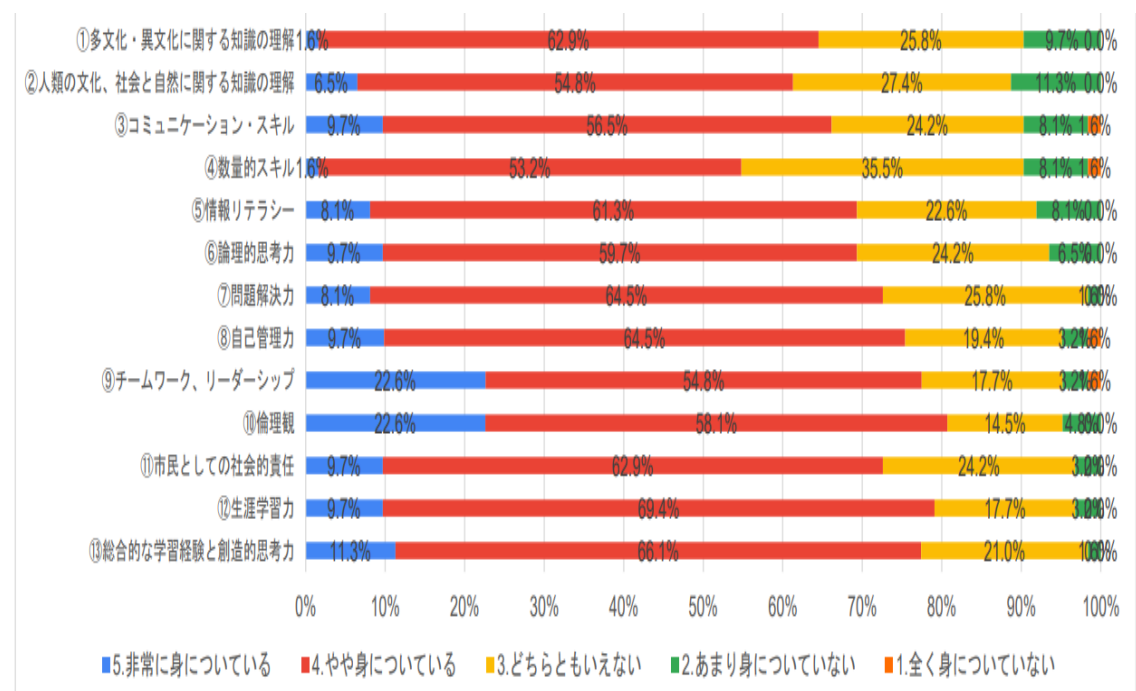
「非常に身につけている」「やや身につけている」が最も高い項目は、「倫理観」で 86.5%、次いで「問題解決力」「総合的な学習経験と創造的思考力」85.4%であった。一方、最も低い項目は「数量的スキル」59.7%であった。

図 2-3 学士力（健康福祉学科）



「非常に身についている」「やや身についている」が最も高い項目は、「人類の文化、社会と自然に関する知識の理解」「論理的思考力」「市民としての社会的責任」「生涯学習力」「総合的な学習経験と創造的思考力」89.5%、「倫理観」89.4%であった。一方、最も低い項目は「数量的スキル」73.7%であった。

図 2-4 学士力（子ども学科）



「非常に身につけている」「やや身につけている」が最も高い項目は、「倫理観」87.2%、次いで「総合的な学習経験と創造的思考力」86.1%「問題解決力」85.1%、であった。一方、最も低い項目は「数量的スキル」62.4%であった。

表2 学科別平均値のクロス表

	福祉心理学科	健康福祉学科	子ども学科	有意差
多文化・異文化	3.80	3.94	3.56	学科間有意差なし
人類の文化・社会と自然に関する知識	3.71	4.11	3.56	健康福祉学科と子ども学科間で有意差あり P<0.05
コミュニケーションスキル	3.85	4.05	3.65	学科間有意差なし
数量的スキル	3.60	3.95	3.45	学科間有意差なし
情報リテラシー	3.78	3.95	3.69	学科間有意差なし
論理的思考力	3.95	4.21	3.73	健康福祉学科と子ども学科間で有意差あり P<0.05
問題解決力	4.01	4.11	3.79	学科間有意差なし
自己管理能力	3.91	4.05	3.79	学科間有意差なし
チームワーク・リーダーシップ	3.90	4.11	3.94	学科間有意差なし
倫理観	4.21	4.26	3.98	学科間有意差なし
市民としての社会的責任	3.99	4.21	3.79	学科間有意差なし
生涯学習力	3.93	4.21	3.85	学科間有意差なし
総合的な学習経験・創造的思考力	4.04	4.11	3.87	学科間有意差なし

健康福祉学科の自己評価が高く、子ども学科が低い傾向であった。「人類の文化・社会と自然に関する知識」「論理的思考力」では、健康福祉学科と子ども学科の差に有意差があった。それ以外の項目では学科間有意差はなかった。

「総合的な学習経験・創造的思考力」は、卒業研究が必修科目である子ども学科より、選択科目の福祉心理学科・健康福祉学科のほうが自己評価が高かった。

4 分析・考察

福祉力においては、大学全体として「協調と協働を表現する力」「知識・技能を身につける力」の自己評価が高い傾向にあった。一方で「地域を視野に貢献する力」は低い傾向にあ

った。この結果はキャリア支援課が行う卒業生評価・就職先に関するアンケート結果においても同様の結果であった。

学科別比較では、「地域を視野に貢献する力」が健康福祉学科は高い傾向だが、子ども学科の自己評価は低く、学科間有意差があった。一方で有意差はなかったが、「表現と創造する力」は子ども学科が高い傾向であった。「表現と創造する力」は、就職先のアンケートでは評価が低い傾向にあり、自己評価との乖離があるのではないかと考えられる。

学士力においては、大学全体として「倫理観」の自己評価が高い傾向にあり、一方で「数量的スキル」が低い傾向にあった。「数量的スキル」は全学科で評価が一番低く、本学の課題とすることができる。近年、保育・福祉領域で専門職公務員の求人が増えている中、公務員試験で求められる「数量的スキル」を向上させていくための対策が求められる。しかし本学のカリキュラムにおいて共通基礎科目に「数量的スキル」が少ない状況であり、今後の検討課題と考えられる。学科間比較では、「人類の文化・社会と自然に関する知識」「論理的思考力」が健康福祉学科は高い傾向だが、子ども学科の自己評価は低く、学科間有意差があった。この差が学科のカリキュラムの特性なのか、学生の特性なのかは横断的に比較して分析していく必要がある。「総合的な学習経験・創造的思考力」の学科間の差については、社会福祉学部で卒業論文を提出した学生が17%にも関わらず、卒業研究必修である子ども学科よりも評価が高い理由も横断的分析が必要と考えられる。

全体的に、健康福祉学科の自己評価が高い傾向にあり、と子ども学科は低い傾向にあることについて、学科の特性なのか横断的に比較して分析していく必要がある。